

# ディベートを英語教育に活かす

与那覇 恵子\*

## < 概 要 >

英語を通して思考力を深め、内容ある自己を英語で伝えることのできる若者を育てたい。生徒のコミュニケーションの道具としての英語力の不足、自分達の地域社会、国の問題について考えることをしない思考力の不足を感じてきた私のそんな願いをかなえてくれる英語教材がディベートであった。ディベートの教材としての魅力はディベート本番へと至るすべてのプロセスが重要な学習内容を持っており、4技能の育成にかなっているということだ。ディベートはしかし、英語力にしても扱う題材にしてもレベルが高い、難しいというイメージが強い。その抵抗感を和らげ徐々にディベートへと導くため、自分なりの小さな工夫をしながらディベートを授業に導入してきた。その10年間の授業を振り返りつつ、ディベートを終了した時の生徒の感想文から、生徒がディベートから何を学んだと感じているのかを見る時、私の目的はディベートで達成されつつあると信じることができる。

## Abstract

Cultivating young people who can not only communicate but also tell their own opinions on social or political issues in English was my objective when I was teaching high school English. I was often bothered by students' lack of English ability to communicate and their lack of positive attitude to think about issues relating to their own community and their own country. Then I found debate was appropriate teaching material to realize my objective. The charm of using debate as a teaching material is that the process itself contains important content to learn and it's suitable for improving all four skills; listening, reading, speaking, and writing. Debate, however, gives the impression that it's difficult to introduce in high school English education because of English level as well as topics.

While trying to soften that image, I introduced debate in my English classes. Reviewing the debate classes and the comments of students, I believe that students are learning the importance of telling their own opinion as well as improving their English through the experience of debate.

## ～はじめに～

10年以上も前のことだが、ある英語教育関係の雑誌に載った一人のアメリカ人女性のコメントが心に残った。「私の友人が日本で英会話講師として勤務する前に、中国、シンガポール、フィリピンなどを旅行した。旅行中、彼女は多くのアジアの若者と彼らの国やその生活について英語で語り合う機会があった。しかし、東京で働き始めて、日本では若い人達と色々なことについて意見をかわす機会が殆ど得られないということに驚いている。」という内容で、“She wonders: Why are Japanese afraid to use English? And, why are they reluctant to explain what they think about national problems or daily life?”と結ばれていた。

そこには、日本の若者に対して2つの問題が提示されていた。1つはコミュニケーションの手段としての英語力の不足、そしてもう1つはファッションや娯楽などの軽い話題にしか興味を示さない、自分達を取り巻く地域社会、国や国際社会の問題について考えることをしない思考力の不足である。高校の英語教育に携わってきて10年が過ぎようとしていた私自身が日頃感じてきた問題をみごとに指摘された思いだった。何のための英語教育なのか。コミュニケーションの手段としての英語を使って、より中身のある話ができる若者を育てたい。英語を通して思考力を深め、内容ある自己を英語で伝えることのできる若者を……。そんな私の思いは、このコメントを読んで一層強まった。

\*名桜大学国際文化学科 助教授

### ～英語教材としてのディベートの魅力～

コミュニケーションの手段としての英語力を養成すると共に、思考力を鍛えていく、それにうってつけの教材が、その頃出会ったディベートであった。ディベートという言葉はまだ耳新しかったが、最初から最後まで肯定、否定に分かれ論を戦わせていく、ディスカッションとも異なる今までにないスタイルが興味深かった。人は伝えたい、あるいは伝えるべき内容を持った時、必然的に伝える道具としての言語を向上させることにも力を注ぐということを考えた時、ディベートは英語力向上にも大きなモチベーションを与える教材となると考えた。又、ディベートでは Listening, Speaking, Reading, Writing の受信と発信の4技能すべてが要求される。その意味で4技能が統合された教材であり、ディベート本番に至るプロセスすべてが重要な学習内容を持っている。以下にそれぞれのプロセスにおける学習内容やその意義を挙げる。

論題の決定-----論題選びを通して、生徒に地域社会、国内、及び国際社会の諸問題に気づかせ、意識を深めるさせることができる。 リサーチ-----効率重視の一斉授業形態で教師中心となりがちな日本の教育の中で、自己学習力を育成し、情報化社会の中で必要な情報を取捨選択していく能力の育成につながる。英語の文献を読む必要もあることから、skimming や scanning の力も養成される。 原稿の作成-----3～5分のスピーチの原稿を書くのはライティングに慣れていない生徒にとってはかなりの作業であるが、私は高校の英語教育の中でライティング力養成のための時間は以外に不足しており、もっと増やすべきであると思ってきたので大切にしたいプロセスである。日本人に不足していると言われる論理力も育成される。 ディベート本番-----スピーキング力、リスニング力はもちろん、Note taking 力も養成される。相手に理解してもらうには、声の大きさ、明瞭さ、発音などに注意しなければならないし、相手の主張を聞き取るにはリスニング力プラス単語力が必要だ。特に勝敗を決定する Cross Examination では即戦的なリスニング力、スピーキング力が必要である。

### ～ディベートへと至るための諸活動～

ディベートに対しては英語力に関しても、その扱う題材にしてもレベルが高い、難しいというイメージが強い。そんなディベートを取り入れていく際に日常的に行ってきた私なりの小さな工夫は以下のようなことである。

(1) 教科書を使つての授業の中で Small talk や Warm-up Activity の時間を有効利用する。

Small talk や Warm-up Activity は授業の雰囲気作りや教材導入などに使われるが、この5～8分の時間は又、それぞれの教師の個性を生かした活動がやりやすい比較的自由的な時間でもある。そこに英語で身の回りの問

題について考える機会をできるだけ盛り込む。例えば Small talk では、最近の話題やニュースを取り上げ、写真や絵で視覚に訴えながら 5 W 1 H の質問、“Who are these people?” “What happened here?” “When did it occur?” “How can we solve this problem?” などで絞り込み、生徒自身に問題の所在に気づかせ説明させるようもっていく。

自称 “One minute non-stop talking” では、ペア活動で決められたトピックについて一分間 Non-stop で英語で話させる。相手がつまったらパートナーはすかさず 5 W 1 H で質問するなどして、話し続けられるよう助ける。1分間と時間を区切ることで、Non-stop で話すようしむけていくことで、ゲーム的感覚をもたせ話さざるを得ない雰囲気にもっていく。英語での即戦力が養成されることをめざして、長くて苦痛の一分間が短くて楽しい一分間になることをめざして取り組む活動だ。“What surprising news did you hear recently?” などのトピックで身の回りで行っている事への関心を喚起する。

(2) ディベートへの抵抗感を取り除くゲーム的活動を取り入れる。

自称 “Debatable topic collection game” は論題について学習した後、グループに分かれ決められた時間内で debatable な論題をできるだけ多く考えつくことを競うゲームである。これは日本語で行う、Brain storming のようなゲームである。論題を決定するための Warming-up Activity であるが、各グループの個性が出たり、色々なトピックが飛び出して高校生の問題意識の所在や発想のおもしろさを楽しめる。傑作な論題、奇妙な論題には爆笑、良質の論題には思わず感嘆の声があがり、「楽しかった」という生徒のコメントがもたらされた。

又、自称 “Why Because Game” は、ディベートの基本である論拠を基に思考するという思考過程と、異なる立場から物事を客観的に見るという複眼的思考を身につけさせるための Warm-up Activity である。

|                                   |                                  |
|-----------------------------------|----------------------------------|
| A : Do you like(support) ~?       |                                  |
| /                                 | \                                |
| B : Yes, I do.                    | No, I don't.                     |
|                                   |                                  |
| A : Why do you like (support) it? | Why don't you like (support) it? |
| \                                 | /                                |
| B : Because ~.                    |                                  |

上のような簡単な会話パターンだが、～にあたるトピックを具象から抽象へ(例：有名人の名前や国、学校から政治家、政策へ)変化させることで、又以下のようなルールで生徒のレベルに合わせることができる。

質問に対し、自分の気持ちのままに答えることができるし相手と同じ理由を挙げても良い。自分の気持ち

のままに答えることができるが、相手と同じ理由を挙げているのではない。相手が肯定なら、自分は否定と必ず反対の意見を述べなければならない。一人で肯定、反対両方の意見を述べる。

ディベートの難しいというイメージや抵抗感を取り除くためのゲーム感覚で行う活動で、ディベートの論題を決定する前だと debatable な論題を考えるための Warm-up にもなり、ディベートの論題が決まった後だとそれをトピックにすることでこれからの論理の構成を考える助けにもなる。

### (3) Authentic な教材をできるだけ取り入れる。

ディベート自体、優れて Authentic な教材であるが、日頃から Authenticity を大切にすることで生徒の興味、関心を引きつけ、色々な問題への意識の喚起を図る。例えば、身近な話題や社会問題を取りあげた地域の新聞(琉球新報や沖縄タイムスの英語版)を色々なリーディングのプリント教材にし政治、社会問題関連の専門用語を学ばせたり、地域性あふれるローカル版コミックのせりふ部分を穴開けにしたライティング教材で地域独特の文化や問題を学ばせる。例えば、クリントン元大統領訪日の際の通訳付きインタビューをインターネットから音声と共に取り出し、穴埋めのリスニング教材にする。あるいは、9.11 直後にインターネットに寄せられた各国の人々の意見を拾い上げたプリント教材を読ませ、休み時間や放課後を利用して3~4人ひとグループでALT とそれをトピックに話をするを課題とし、その後英語の感想文を提出させる。又、6.23(沖縄戦終了を記念した慰霊の日)には、図書館で展示されている沖縄戦や米軍基地などの資料を基に作った英語での質問プリントを生徒に配り、放課後を利用して図書館での展示を見なければ書けない課題を課す。生徒は楽しいこと、面白いことに目を向けがちだし、又、自分たちの地域の歴史、問題に対し目が向かない程、訳の分からない忙しさに振り回されていたりする。史実を年表や具体的な数字によって正確に把握しながら、過去の出来事が現在の問題へと結びついていることを学ばせるための課題でもある。

### (4) 普段の授業の中で英語の Input と Output の量を増やす。

50分や60分といった限られた授業時間の中で、英語の Input の量をできるだけ増やし、英語による Output の機会を生徒にできるだけ多く与えるようにする。英語の Input に関しては普通科が70~80%なら国際科は95%~100%など、生徒の英語力のレベルを考慮しながら、英語による英語の授業を心がけてきた。しかし、4月の段階で英語による英語の授業をと張り切るが、生徒の難しそうな表情などで徐々に英語の量が減っていく自分に気づいたりする。まずは生徒との人間関係を築きあげ、徐々に英語の量を増やしていくという逆をすべきだと反省し

た。生徒の Output の機会を増やすには、教師は時に自身の英語による Output を控えめにしなければならない。つまり単語やレッスンの内容の復習では教師が英語を言い生徒に日本語訳を言わせるのではなく、教師の日本語や日本語訳のあとから生徒に英語で続けさせたり、英語で音読させたりする。同時通訳者訓練で使う単語の Quick response や頭出し訳を日本語から英語への転換で行わせるということだ。教師は英語による Input をできるだけ多く与えつつ、日本語の Output も生徒よりは多くなるということになる。又、英文法の学習後には、その文法事項を盛り込んだ制限英作や自由英作の時間を必ず設定して知識を与えるのみでなく、与えられた知識を利用できるようにもっていく。(Skill getting から Skill using へ) 例えば、時制を学習した後はそれを使っての Information Gap Game を連休後に行ったり、比較級の学習後は色々な比較級の形を使って家族や級友を比較していく英作を課題とし、ユニークな優秀作品を選び発表するなど。そして日頃から、あるいは夏休みなどに英語による Essay を課すなどして、できるだけ英語で書く課題を与える。限られた授業の中で教師が生徒に与えられる英語の Input の量や生徒の英語による Output の量を意識すること、そのために毎時間の Teaching Plan の中で、生徒が今どのような動きをし、どの技能が、又どれだけ多くの技能がプランの中に盛り込まれているのかをチェックすることも必要だ。

### ~ディベートを授業に取り入れる~

ディベートは国際関係などのコースでは、国際理解や外国事情の時間で、普通科コースではOCCの時間や英の学期末テスト終了後の2週間程を利用して行ってきた。具体的にはA高校では2年生の外国事情の時間、B高校では2年生の国際理解の時間と普通科2年生の英の授業の中で、又普通科3年生の選択のOCCの時間にそれぞれ行ってきた。A高校ではFETの先生のアイデアで英語の得意な生徒達によるモデルディベートを他の生徒達に見せて、ディベートがどのようなものであるかをつかませた後にグループごとのディベートに入った。(モデルディベートの指導は放課後を利用) 以下はそれぞれのスケジュール例である。

#### A高校

(1) 導入に“Listen to me”(映画「ディベートにける青春」)からディベートシーンを見た後、OHPによるディベートについての説明を聞く。(1時間)

(2) ディベートの基本語彙を学習した後“Why Because Game”を楽しむ(1時間)

(3) 論題について学習後、“Debate theme collection game”を楽しむ。(1時間)



(4) 生徒達の中から選ばれたモデルディベーターによるモデルディベート(1時間)(5)(4)の録画ビデオを見て意見交換後、6人1組に分かれ論題を決定(1時間)

(6) 図書館でリサーチを行い英訳を提出(3~4時間)

(7) ディベート本番(1時間2組で4時間)3人制

合計12~13時間

#### B高校

(1) A高校の生徒によるディベートの録画ビデオを見た後、OHPによるディベートについての説明を聞く。

(1時間)

(2) 論題について学習後、“Debate theme collection game”、論題を決定する。(1時間)

(3) ディベートに使われる表現、語彙などの学習“Why-Because game”(1時間)

(4) 図書館、コンピューター室でリサーチ(4時間)

(5) 原稿書き・提出(2時間)

(6) ディベート(4時間)3人制 合計13時間

#### B高校 20人の少数クラス

(1) 沖縄県英語ディベート大会で1位、3位となった先輩のディベートの録画ビデオを見た後、OHPによるディベートについての説明を聞く。(1時間)

(2) ディベートに使われる表現、語彙などの学習後“Why-Because game”(1時間)

(3) 図書館、コンピューター室でリサーチ、原稿書き(4時間)

(4) ディベート(5時間)2人制 合計11時間

ディベートのフォーマットはFETの先生の提案により3人制、2人制の2例を使った。以下がそれぞれの例である。

#### 3人制

|     |                         |      |
|-----|-------------------------|------|
| 肯定側 | 1st constructive speech | (3M) |
|     | preparation time        | (1M) |
|     | Cross examination       | (1M) |
| 否定側 | 1st constructive speech | (3M) |
|     | preparation time        | (1M) |
|     | Cross examination       | (1M) |
| 肯定側 | 2nd Constructive speech | (3M) |
|     | preparation time        | (1M) |
|     | 2nd Constructive speech | (3M) |
| 否定側 | 2nd Constructive speech | (3M) |
|     | preparation time        | (1M) |
|     | Rebuttal                | (3M) |
| 肯定側 | Rebuttal                | (3M) |
|     | Rebuttal                | (3M) |
|     | 合計                      | 26M  |

ディベートの評価は生徒にも Evaluation Sheet を配り評価させコメントを書かせるが、生徒の評価は成績には反映させず、教師のみの評価で成績はつける。評価の観点は論理性(logicality) 証拠資料(evidence) 英語(Fluency, Volume, Pronunciation) 態度(attitude)である。

普通はディベート本番での出来だけで評価するが、年度によって生徒の英語力が低く原稿の添削をする必要があるようなクラスがあり、その場合は原稿とディベートの両方の評価を合計して成績をつけた。

#### ~ディベートそれぞれのプロセスにおいて考慮すべき点~

論題の決定では、一つの命題で表現されているか、肯定、否定の決着がつくものか、問題を含んだ、時代に合った大切なテーマであるか、明確に表現されているかなどに注意させながら論題の定義を説明する。ディベートに対する生徒の Motivation を高める第一歩は論題を生徒自身に決定させることだと思うので、各グループ自ら選んだ異なる論題でディベートをさせてきた。ただし、B高校の場合は、そのシラバスが沖縄県高等学校英語研究会主催のディベート大会出場に照準を合わせているので、大会の論題で統一してディベートをさせる。論題で Motivation を高めるという観点からは良くないが、他の生徒も同じ論題でリサーチしているので、他のチームのディベートを聞いていて理解しやすいという利点はある。リサーチでは今や図書館よりもコンピューター室の予約が欠かせない。有効な Evidence とするには、情報源がきちんと把握されていなければならない、日付やタイトル、組織名などの記入漏れがないよう、又どれだけ Authentic な情報源であるかにも気をつけさせることが必要である。どの情報が新しいかで勝敗が決定したりすることを教える。原稿書きでは表現例を示し、時には

#### 2人制

|     |                         |      |
|-----|-------------------------|------|
| 肯定側 | 1st Constructive speech | (5M) |
|     | preparation time        | (1M) |
|     | Cross examination       | (3M) |
| 否定側 | 1st Constructive speech | (5M) |
|     | preparation time        | (1M) |
|     | Cross examination       | (3M) |
| 肯定側 | 2nd Constructive speech | (3M) |
|     | preparation time        | (1M) |
|     | Rebuttal                | (3M) |
| 否定側 | 2nd Constructive speech | (3M) |
|     | preparation time        | (1M) |
|     | Rebuttal                | (3M) |
| 肯定側 | Rebuttal                | (3M) |
|     | Rebuttal                | (3M) |
|     | 合計                      | 27M  |

形式化したパターンを統一して使わせると書く方も書きやすいし、聞く方もわかりやすい。

例：“We, of the Affirmative support the proposition,”  
“Before we present the problems with the status quo, I would like to define the following terms.”  
“The Affirmative team has presented 3 problems with the status quo. They are ~.” “I’m ready for questions.” etc.

(沖縄県高英研主催ディベート大会規定より)

生徒の英語力が十分でない場合は、日英両方の原稿を提出させ、言いたいことが英語できちんと表現されているかをチェック、添削は原稿の Evaluation を終えた後に行い返却する。

ディベートの本番では、1st Constructive speaker は殆ど原稿を基にスピーチすればよいが、rebuttal は相手の主張の要点をメモし、用意した原稿に補足しつつ反論していかなければならないので、相手側の論をできる限り多く推測し、その反論を前もって考えておくように指導する。

#### ～生徒の反応及び感想～

ディベートをやると告げられた時の生徒の最初の反応は大抵、「難しすぎる!」「自分達にはできない!」であるが、最終的にディベートが終了して感想などを書かせると殆どすべての生徒が表現は異なるが、やり遂げた事への満足感や英語力向上にとっても役だったとのコメントを書く。又、学力の高い生徒ほど、ディベートへの興味関心は高く、特にディベートで勝敗を味わった後、その喜びや悔しさが英語学習へのモチベーションにつながっていくのを見てきた。時間があるとディベートの説明も Warm-up Activity を楽しみながら行え、そんな時はやはりディベートに対する好感度も高くなるが、そのようなゆとりが無い時間不足の時や上から与えられた論題の場合は、学力の低い生徒ほどディベートを苦痛に感じるようだ。A 高校で初めてディベートを外国事情の授業で行った時の生徒の感想では、やって良かった、ためになった、楽しかったが90%以上であった。ただし、エネルギーを使いすぎる、大変だという意見も半分以上あった。結論として、これは私自身の感想でもあるが、エネルギーや時間を使って大変だが、ためになり面白いということになる。同じ学校での翌年の生徒の感想もほぼ同じである。B 高校では時間的ゆとりも無く普通科の生徒の感想文は取り損なったが、英 の授業全体に関するアンケートの中で、「ディベートは英語力をつける上でとてもためになった。ディベートだけやっていても英語力はつくかも。」とのコメントを書いた男生徒が数人いた。感想を読んでいる限り、ためになった、良かったは毎回90%以上に達している。ただ、B 高校での場合、論題が

沖縄県高校英語研究大会の“The Japanese government should allow the application of cloning technology to human beings” のディベートテーマで統一しなければならなかったということもあるのか、20名中2名は色々学べたと言いつつ “but I don’t like debate..” という表現があったのが残念だ。手元に残っている感想文の中から、ディベートの授業について生徒がどのような感想をもったのか、どういう点で英語力向上に役立ったと思ったのかを具体的に見てみよう。

感想文は1993年 A 高校 2 年43人、1998年 B 高校 2 年35人、2003年 A 高校 2 年20人の計98人の98枚である。A 4 白紙に自由に書かせた感想文から、ディベートの授業は～だった、～に役だったなどと明記されている表現をピックアップして項目別に振り分けてみた。もちろん、一人の生徒が2つ以上の項目に言及していることが多いので合計は98とはならない。

「ディベートの授業について英語か日本語で感想を書いてください。」という教師の要求に答えたものである。まずディベート全般についてのコメントでは

ディベートはむづかしかった・・・35人

ディベートは楽しかった。(好き)・・・34人

ディベートはためになった。

(やって良かった)・・・70人

ディベートは嫌い(やりたくない)・・・5人

98人の中で嫌いと否定的にコメントしたのは5人だけだという結果はうれしい。

嫌いであるとした5人の理由は難しすぎる、時間がかりすぎるであった。

次に具体的に～に役だったと明記している表現を取り上げて見てみると

社会問題などについて考える力・・・61人

表現力(Writing, Speaking)がつく・・・20人

単語力が養成された・・・16人

チームワークを学んだ・・・4人

読む力や読書力に役立った・・・3人

リサーチの仕方を学んだ・・・3人

リスニングの力がついた・・・3人

ただ「いろいろなことを学びました。」「英語力向上にとっても良いと思いました。」のような表現に関しては、ディベートはためになったという項目だけに数え入れたので、実際はもっと多い数になるのかもしれない。以下にそれぞれのグループから感想文2～3例を挙げてみる。

# A 高校 2 年 第一回グループより

ディベートは自分にとって良い経験でした。私は制服についてのディベートをして、制服についてあらためて考えることができた。他の人達もそのテーマについて考えることが出来、自分の意見をはっきりもてるようになったと思う。それに、人前で英語を話す時のポイントがつかめてきた。Eye contact も大切だし、Performance、声の強弱など沢山のことが学べました。これから、もっと自分の気持ちを表現しながら英語で話せるように努力したい。(2 - 7 K.I.)

今年初めて英語でディベートをやって良かったことは、自分の言いたいことが英語で表現できることと、どんどん移り変わっていく国内外の社会情勢に対して関心をもつことができたことです。今まで、僕は中学校で日本語による意見発表は2～3やりましたが、それは一方から意見を述べるだけで、何の反対意見もありませんでした。でも、この英語によるディベートは、賛成、反対の両方の立場から事例などを基に意見を対立させるので聞き手としてもとても興味深かった。特に最期の班のディベートは素晴らしかった。悪かった点はやはり意見を言うときは、なるべく原稿を見ないで言えば良かったと思う。(2 - 7 K. I.)

ディベートはとても良かったです。私のグループはRefugeesを取り上げた。アジアの人々は日本をどう見ているのか、感じているのかを知った。とてもショックだった。今日日本がどこに目をむけるべきかがわかった。又、多くの専門用語を知ることができた。とても勉強になって Very 楽しかった。3 学期もぜひやりたい。確かに時間を与えられた時やるべき事をしなかつたりしたけど、でも今度はコツもわかってきたから、そんなに時間はとらないと思う。ちゃんと真面目に頑張るから 3 学期もやりましょう。(2 - 8 N. M.)

# A 高校 第 2 回グループより

I really think debate is good for us. I could learn many things from debate. When I research each topic,I could learn many new things. About Monorail, our member worked so hard. We went to Okinawa Prefectural Office to gather information. It was a great experience myself. (N. K.)

Debate in F.A. class was very hard for us. Because there were many things to do. For example, looking for materials, talking with members, writing English sentences and memorizing it. It was very hard but we could get good memory. It's a wonderful

experience. Students should have debate. (M.K.)

I became very serious when I heard that we do debate. I thought it was very difficult for me. But I learned making right sentences in English in debate. I did it with my friends. I learned a lot of vocabularies. I think my English is better than before. But my English is still poor. I must study English hard. I think debate is good for me. It was hard but I enjoyed it. (Y.I.)

Certainly debate was very difficult for me, but I want to debate again. I researched about Nuclear weapons. Usually we think it very dangerous for us. But some people think world war was finished early because of Nuclear weapon. I was very surprised. We should understand another opinion more. Though we don't support another opinion, I have got a wide sight of to see the world by debate. (Y.M.)

# B 高校

Of course I could get knowledge about clone technology. And I was given the chance to write English and speak English. I suppose my English skill is much better than before. But I still don't have confidence in my ability. So, I will do my best. (A.H.)

It was so hard, because we should listen, write, speak, and think at a time. But all of us could do them!! I have learned to cooperate with partner, to listen carefully, to speak strongly, to overcome our hard schedule and many other things. And I appreciate you. Thank you very much. (N.H.)

I learned how to research, how to write, how to speak and how to listen. Also I learned many things about clone technology. I learned a lot of things. (H.T.)

I learned a lot of words and terms. Thanks for this debate, I become to be able to listen to English news more than before. And I also learned, if I make efforts, I could do everything. I learned the importance to argue my opinion. I learned debate is fun! ! (R.Y.)

感想を読んで印象深いのは、生徒がディベートをやっ

たことで自信をつけたり、逆に自分の力の無さに頑張ろうと思ったりしていることで、そんな時の生徒の目の輝きが私に自信を与え、ディベートをこれからもやっこうという自分自身のモチベーションにつながっていると思う。そして何より生徒が英語で自分の意見を述べることの大切さを学んでくれた時にやりがいを感じている。

#### ～問題点・課題点～

ディベートで最も難しく、又最も面白いのが Cross Examination であるが、これをどうするかが問題の一つ目である。相手の主張を理解した上で、相手を窮地に追い詰めるような質問を用意し、こちらの強さを印象づけなければならない。これがうまくできるにはかなりの英語力が必要とされる。生徒の英語のレベルが impromptu な質疑応答に達しない場合は、対戦相手と情報交換をして質問を準備することを許すが、その場合必ず 1～2 つは情報交換なしの質問も準備させるようにしている。国際関係科のように英語を得意とする生徒が多い場合には、相手側の質問を推測、予測し答えを考えておくよう指導する。ディベート成功の鍵を握るのは Cross Examination だ。2 つ目はディベートが行われている時、聞き手となる生徒

達が目の前で行われているディベートをどれくらい理解しているかという点である。統一論題の場合には、同じようなリサーチをしているので理解しやすいが、論題が異なる場合は専門用語などが出てくると難しい。そのような場合は Key words をプリントさせてそのチームで配布させたり、黒板に意味を書かせたりするのも理解を助ける。2 分間の preparation time に、教師が自分のメモを基に日本語や英語で流れを簡単に要約してやるのも確認の意味で良いと思う。(教師は気が抜けなくて大変だが) 3 つ目は国際関係科のようにシラバスにディベートが設定されている科目はよいが普通科のようにそのための時間設定が無い場合、時間の確保が難しいということだ。最終目標は生徒にディベートを好きになってもらうことだと言っても良いほどなので、Warm-up Activity を入れながら楽しめるように導入していきたいが、時間の余裕が無い場合それが難しい。ディベートは入試対策としても力をつける一つだと思うが、現在の状況としては受験対策を阻害するものとして捉えられているのではないか。入試の差し迫っている 3 学年はともかく 2 学年あたりなら取り入れて良い、優れた教材として推薦したい。